

平成 22 年 6 月 15 日現在

研究種目：基盤研究 (B)

研究期間：2006～2009

課題番号：18320113

研究課題名 (和文) パーソナルメディアとしての軍事郵便と従軍日記研究

研究課題名 (英文) Study on Letters and Diaries as Personal Media written  
by Soldiers during the Wars in Modern Japan

研究代表者

新井 勝紘 (ARAI KATSUHIRO)

専修大学・文学部・教授

研究者番号：40222707

研究成果の概要 (和文)：

本研究では、軍事郵便と従軍日記をパーソナルメディアとしてとらえ、資料の所在を明らかにするとともに、軍事郵便の内容や制度史、軍事郵便・従軍日記を記した人々の戦争に対する意識や対外認識についての考察を重ねた。そのために現地調査を実施し、資料の収集や写真撮影を行ない、その分析を試みた。また、研究成果を公開し、各地の研究団体と積極的に連携を図った。こうしたなかで現在、全国各地で個人及び保存機関などが軍事郵便・従軍日記の翻刻や出版をさかんに取り組んでいることを把握した。それにより軍事郵便・従軍日記がいまだに多くの人々に強い影響力をもっていることを認識するとともに、その内容分析の深化をはからなければならないという認識に至った。

研究成果の概要 (英文)：

In this study, the letters and diaries of soldiers in wartime are taken as personal media. While clarifying where the materials were located, we considered the content and the institutional history of the soldier's letters, and the consciousness and external perception of the war among the people who had written the letters and diaries. For that purpose, we conducted fieldwork, and gathered materials and photographs, which we then tried to analyze. In addition, we opened the results of the study to the public and formed cooperative relationships with research organizations in various parts of the country. In the study, we grasped that individuals and institutions involved in the preservation of these historical materials were continually grappling with the tasks of reprinting and publishing of the diaries. Based on this, we find that these letters and journals still have an impact on many people, and recognized that we must attempt a deeper analysis of the contents.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	2,300,000	0	2,300,000
2007年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2008年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	7,100,000	1,440,000	8,540,000

研究分野：日本近代史

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：日本史、宗教学、社会学、メディア、軍事郵便

1. 研究開始当初の背景

軍事郵便とは、戦地もしくはそれに準ずる地に派遣されている軍隊、軍艦、水雷艇、軍衙、軍人、軍属およびその他の軍衙の許可を得た者から出された郵便物と、それに宛てた郵便物を指す。

日本における軍事郵便制度の確立は、1894年の日清戦争時に出された勅令がはじまりである。日清戦争時だけでも内地と戦地とを合わせて1239万通余りの数の軍事郵便が発信されている。これが日露戦争時には2億通以上の数になる。「軍事郵便規則」や「軍事郵便取扱規定」が定められ、日本の軍事郵便制度は、日露戦争を契機として整ったといえる。軍事郵便に関する諸規則は、その後、増補改訂をしつつ、アジア太平洋戦争へとつながり、この制度は1946年まで続く。

近年、日本近現代史のなかで、さまざまな視点から戦争研究が活発になっているが、軍事郵便を資料として分析する研究は少ない。上記のように日清戦争からアジア太平洋戦争まで膨大な数の軍事郵便が出されたが、現在、軍事郵便そのものの発掘と公開が遅れている。

戦争体験者が高齢化し、間もなく直接の聞き取りも困難になるなかで、改めて軍事郵便に注目する必要がある。軍事郵便の内容を分析することで、兵士の戦争体験や銃後の人々の意識を考察することができるだろう。軍事郵便は今後の戦争研究の進展をもたらすのに不可欠な資料である。本研究は、軍事郵便の所在調査をはじめとして、その基礎的研究を行う。

2. 研究の目的

本研究の目的は、軍事郵便と従軍日記をパーソナルメディアとしてとらえ、以下の点を明らかにすることを目的としている。

(1) 軍事郵便の制度史

軍事郵便制度の根拠となる法律、規定など、その成立の経緯や概要を把握する。

(2) 軍事郵便、従軍日記の所在調査

公刊されているものや個人蔵のもの、資料館・研究機関が収蔵しているものなどが、どれほど存在するのかを調査し、その規模と広がりを見明らかにする。

(3) 兵士の意識の分析

所在確認をした軍事郵便や従軍日記を解読することで、兵士の戦争観や対外観などの分析を進める。

(4) パーソナルメディアと地域社会

資料の所在が明らかとなっている地域において実地調査や聞き取り調査を行うことにより、その地域において軍事郵便や従軍日記研究がメディアとしてどのような機能を果たしていたのを見明らかにする。

### 3. 研究の方法

軍事郵便の史的考察を行う場合、以下の通り、二つの方向性がある。

#### (1) 制度史研究

制度史については先行研究の調査以外には、郵政資料館（通信総合博物館）、切手の博物館などの郵便制度に特化した博物館・研究施設において制度史の資料を収集し研究する。実際の軍事郵便のやり取りの際に参考にされたと考えられるパンフレットやマニュアル類などを重点的に研究する。

#### (2) 軍事郵便の所在調査

発信人と受取人が明らかで、数としてある程度まとまったものの所在が判明している地域の実地調査である。また、全国各地の個人及び保存機関、市民団体などが軍事郵便・従軍日記の翻刻や出版をさかんに取り組んでいる。こうした地域に行き、聞き取り調査を行う。

### 4. 研究成果

研究の目的を達成するために、現地調査や資料の収集、研究成果の公開、研究団体との連携を図った。以下に具体的な内容を述べる。

#### (1) 現地調査の実施

これまでに訪れた主な調査先を資料の所蔵調査と聞き取り調査に分けて挙げておく。

##### ① 資料の所在調査

郵政資料館（通信総合博物館）、国立歴史民俗博物館、切手の博物館、三重県立図書館、すみだ郷土文化資料館、立命館大学国際平和ミュージアム、兵士・庶民の戦争資料館、知覧特攻平和会館、平和資料館・草の家など。

##### ② 聞き取り調査先

三重県津市、山口県下関市、高知県高知市、鹿児島県始良郡、鹿児島県瀬戸内町（加計呂麻島）など。

#### (2) 資料の収集

軍事郵便や従軍日記の収集だけでなく、兵士の意識を多面的に探るため、兵士の凱旋や除隊の際にお土産として郷土に配布する「兵隊盃」も収集した。

#### (3) 研究成果の公開

研究成果としての論考を『歴史評論』、『専修史学』、『郵便史研究』などの学術雑誌に発表した。

#### (4) 研究団体との連携

郵便研究の拠点といえる郵政資料館と、2008年度より研究の協力を図っている。具体的には、定期的な研究会の開催、郵政資料館の所蔵調査、所蔵資料を活用した成果の公表である。

### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

① 新井勝紘、版画家・三井壽が兄からもらった軍事郵便を読むー南画家の父飯山から受けた影響ー、隣人、査読無、23号、2010年、140～152頁

② 新井勝紘、戦場の兵士がもらった手紙を読むー兵士が得た情報の入手は複数あったー、隣人、査読無、22号、2009年、123～132頁

③ 新井勝紘、軍事郵便への複線のアプローチー出す・見る・展示する・考えるー、郵便史研究、査読有、25号、2008年、1～12頁

④ 後藤康行、メディアに描かれた軍事郵便ーイメージにみる戦地と銃後ー、専修史学、査読有、45号、2008年、1～30頁

⑤ 新井勝紘、パーソナル・メディアとしての軍事郵便ー兵士と銃後の戦争体験共有化ー、歴史評論、査読有、682号、2007年、12～26頁

〔学会発表〕（計2件）

① 後藤康行、日本の軍事郵便の展開ーパーソナル・メディアからマス・メディアまでー、メディア史研究会、2009年2月28日、日本大学三崎町キャンパス

② 新井勝紘、軍事郵便を見る・読む・考えるー軍事郵便の保存と歴史的価値ー、郵便史研究会、2007年10月7日、通信総合博物館

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

新井 勝紘 (ARAI KATSUHIRO)  
専修大学・文学部・教授  
研究者番号：40222707

### (2) 研究分担者

西村 明 (NISHIMURA AKIRA)  
鹿児島大学・法文学部・准教授  
研究者番号：00381145